

2024 年 8・15 行動宣言

8 月 15 日、今年も天皇・皇后が出席して行われる政府主催の「全国戦没者追悼式」が開催され、天皇は例年どおり「おことば」を述べようとしている。また例年、閣僚・国会議員など公人による靖国神社参拝も行われている。これらの式典と靖国参拝は、「戦没者慰霊」のためだという。国のために死ぬことは、確かに哀しいことである、だがそれは「戦後日本の繁栄」の礎となったものであり、崇高であり尊いことであると、「戦没者追悼式」は隠然と、靖国は公然と、語り続けているのだ。それはかつての日本の植民地主義・侵略戦争への無反省と無責任をごまかし、予想される将来の戦争参加に「国民」を動員させようとする「精神的装置」としての役割を果たしている。

そうした中で、見逃すことができないのは、この間、自衛隊と靖国神社・護国神社などとの結びつきが、ますます顕著になってきているという事実だ。

今年 1 月 9 日、小林弘樹陸自幕僚副長ら 10 数名が靖国神社を集団参拝し、玉串を奉納したことが明らかになった。そして 4 月 1 日には、靖国神社の新しい宮司に、海自自衛艦隊司令部幕僚長も務めた大塚海夫元海将が就任した。自衛隊と靖国との結合の動きは、突然始まったものではない。自衛隊の学校の生徒が「精神教育」の一部として靖国参拝したり、「大東亜戦争史観」を公然と掲げる「遊就館」に行って「研修」したりしている。防衛大学校の「有志」が例年行ってきた横須賀から靖国神社への徒歩での「夜間行進」に、昨年は 493 人が参加している（同校の入学者数は毎年 500 人前後）。

靖国神社は天皇の神社であり、「軍人が戦争で死ぬこと」を賛美・顕彰し、「先の」侵略戦争を美化し肯定する、政治的・軍事的な宗教施設である。今年 6 月に出た靖国神社の社報には、元陸自幕僚長の岡部俊哉が、「一朝事があった際には祖国日本のために命を投げ出すことを国家から求められ、それを覚悟する自衛官が参拝することは至極当然」「自衛官が国難に殉じた場合に祀る場所は、英霊とともにある靖国神社が最も相応わしい」などと書いている。自衛官・とりわけその幹部が、この戦争神社に参拝する行為が、軍隊と靖国の結びつきを改めて確認させ、「国のために死ぬこと」を礼賛し、その思想を隊員に改めて注入する目的を持っていることは明白である。

自衛隊と靖国神社等との結びつきの拡大は、いうまでもなくアジアにおける米中の覇権争奪の激化の中で「台湾有事」を煽り立て、大軍拡政策を実行し、琉球弧の「犠牲」のもとに社会全体の軍事化が進められている現在における、「戦争国家」体制づくりに向けた動員攻撃の一環だ。軍事と靖国・天皇制の結合と対決し、「国のための死」のイデオロギーを拒否しよう。

私たちは、これらのことに抗議の声を上げるため、8 月 12 日の講演集会と、8.15 反「靖国」行動に取り組む。国家による「慰霊・追悼」を許さず、天皇制いらないの声を上げ、改憲・戦争政策に抗議するとともに、過去の侵略責任・植民地支配責任の追及を忘れない行動を、ともに作り上げていこう。

2024 年 8 月 12 日

国家による「慰霊・追悼」を許すな！ 8・15 反「靖国」行動実行委員会